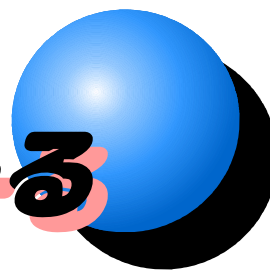




ゆい

・まーる



★VOL 2 令和2年7月2日発行

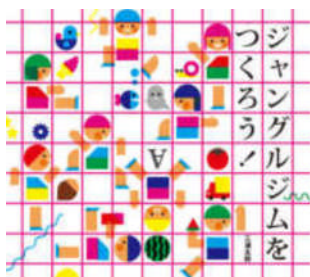


絵本の楽しさをあそび分け

■「ジャングルジムをつくろう」

三浦太郎／作

子どもの想像力をかき立てる作品。●ページの下地にジャングルジムのような



マス目が描かれている変わった構成です。●ページごとに子どもが一人ずつ増え、マス目の色が変わって自動車や船らしき形が現れます。具体的な形をイメージすることが読む楽しさにつながります。●それぞれの形にはさりげなくヒントがあり、それを見つけるのも楽しみ。●三浦太郎さんのシンプルながら計算された絵がステキです。

■「ぼくのばしょなのに」

刀根里依／作

弟や妹ができた子どもの気持ちに寄り添う作品。

●古典的名作、キーツの『ピーターのいす』同様、今まで独り占めしていたお母さん・お父さんを生まれてきた弟や妹に奪われてしまう不安を、ペンギンの子どもを通して描いています。●刀根里依さんの絵は、柔らかでカラフル、そして暖かです。お父さんとお母さんの色を変え、絵本を読む子どもたちが理解できる配慮もウレシイ



気配りです。●子どもの不安を取り除くお父さんとお母さんの接し方がお見事。読み手のお父さん・お母さん、読んでもらう子どもそれぞれが幸福感に包まれます。

■「ぼくだってとべるんだ」

フィフィ・クオ／作

旭山動物園の水中を飛び回るペンギンをほうふつさせる作品。●小さな子どもペンギンが、羽があるのにどうして



鳥のように空を飛べないのか不思議に思い、いっぱい練習をしますが、やっぱり飛べません。●お父さんは、ペンギンは泳ぐんだ、飛べないだよと諭しますが、子どもペンギンはあきらめません。●そして、あるできごとで「飛ぶ」を体験します。●クレヨンの色づかいが絶妙、子どもペンギンの思いを込めた力づよい文も魅力です。自我に目覚め始める子どもに。

■「ほら、ぼくペンギンだよ」

(バレリー・ゴルバチョフ)も紹介。●ペンギンの絵本を読んでもらったカメくんは、翌朝スリッパをはき、おじいさんの背広を着て、ペンギンになった気分ですごい学校へ…。●友だちや学校の先生たちがカメくんと一緒に「ペンギンごっこ」を楽しむところは、子どもの気持ちを肯定し、拍手かっさいもの。

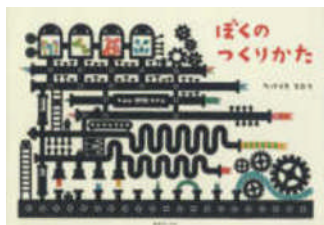


絵本のお届けサービス
「ペンギンくらぶ」で
好評を得た1冊

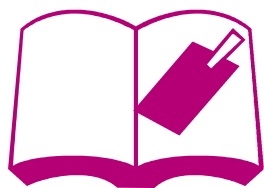
■「ぼくのつくりかた」

たけうちひろ／作

センスあふれる
デザイン
を感覚で楽しむ作
品。●「何か」を



生み出す不思議な工場の世界を、見開きのページをぜいたくに使い、黒を基調とした細かな切り絵で表現しています。●最初の材料は「まあるいりんご、ながーいキャンディ、あまーいばなな、ちゃいろいドーナツ」。ごちゃごちゃした工場の管を通して出てきたのはサル！●最後は「ぼく」が生まれ、君は何からできている？という作者の問いかけで終わっています。●ある子は、何回もお母さんに読んでもらってから「それじゃ、ぼくは何からできているんだろうと、あれこれ材料を考えた」と、感想を寄せてくれました。3歳くらいの子どもに。



本との出会いを ボーイズ&ガールズに

■「ハルとカナ」

ひこ・田中／作

ヨシタケシンスケ／絵

先月に続き、ひこ田中 & ヨシタケシンスケのコンビ作品。●ハルとカナは小学校2年生。ハルとカナが出会い、なかよしになり、好きという気持ちを自分の中で整理し、納得するまでを、ハルとカナの言葉／文でキチンと説明しているので、読んでいる子どもたちの心にしっくりくるとおもいます。●家族や友だちを観察し、行動や会話から個性や良いところを発見し、自分をしっかり確立していくさまは、子どもがどんな風にいろいろなことに気づき、自分で考えていくのかが手に取るように分かるテキストのよう。●物語は、ハルとカナの新しい物語が始まるところで終わり、気持ちよく読み終えることができます。実に得がたい作品。小学校低学年からおとなまで。



■「ぼくと母さんのキャラバン」

柏葉幸子／作 泉雅史／絵

ファンタジーの名手が手がける異世界と現実の世界をつなぐ冒険物語。●主人公は小学校5年生の少年／トモ。ある夜、急にお母さんがいなくなり、ひとりぼっちのトモの前に人間大のネズミが現れます。何やらお母さんを必死に探していて、お母さんの力を必要としているらしい…。そして、物語は中心部へ。●トモは、いやいやながらもネズミやクマたちとラクダのキャラバンを組み、異世界の荷物を届けるために、現実の世界と異世界が隣りあう場所を通り抜ける道案内役を引き受けます。それは、お母さんが子ども時代に体験したことでもあり、いなくなったお母さん捜しにもつながっていきます。●トモたちのキャラバンを待ち受けるのは、通り道を守っている日本土着の妖怪たち。物語のおもしろさは、どうやっていくつもの難関をくぐり抜けるのか…です。物語の終わりにくすっと笑える場面が用意され、読後感はすっきり。小学校中高学年に。



■シリーズ新作2点を *中学年向き 「みちのく妖怪ツアー古民家スティ編」

(佐々木ひとみ／作)

「鬼遊び 闇の子守唄」(廣嶋玲子／作)

■「ごきげんな毎日」

いとうみく／作
佐藤真紀子／絵

小学校4年生のぼくの家に、長野からおばあちゃんがやってきました。おじいちゃんが亡くなった後、一人で暮らし、着物姿が定番だったおばあちゃんは、花がらのワンピースに幅広の帽子、サングラスといった恰好で現れ、まるっきり印象が違います。おまけにスマートフォンを使いこなし、洋風の食べ物を好み、行動的。●おばあちゃんが一緒に暮らし始めてから、家族が暮らすためにはそれぞれが役割を持つこと、役に立つことというおばあちゃんの考え方・ルールが少しずつ家族に根付きます。●さて、不思議なことにおばあちゃんはひんぱんに外出し、どこに行ったのか、家族には秘密。●秘密が解き明かされたとき、おばあちゃんの前向きで未知の世界にも自ら飛び込んでいくパワーに驚きつつ、それを存分に楽しめます。小学校中学年に。



■「ぼくは本を読んでいる」

ひこ・田中／作

物語の中にもう一つ物語を読み、いろんなことを感じる主人公がいる…大きなテーマが2つある変わった構成の作品。●主人公は小学校4年生のルカ。幼なじみのナナと小学校に入学してからずっとなかよしだった安田、そして本が好きだと自己紹介した転校生のカズサ、この4人の何気ない会話を中心に、ルカは、ナナ・安田・カズサたちの考え方との違いを感じつつも刺激を受けます。●ルカは友だちとのやりとりを両親とも話し、両親の子ども時代との違いやそれぞれの家庭の違いも理解しながらも自分の考えを両親に伝え、両親もルカは自分たちの子どもではあ



るけれど、人格を持ち、自分の考えを言える子どもだと描いているところは、『ハルとカナ』とも共通します。これがルカに取っての気づきの物語。●もう一つの物語はタイトルそのもの。ルカは家の中の本部屋にあるお父さん・お母さんどちらかが読んだ『小公女』『あしながおじさん』を一人で読み進め、物語の世界で主人公や大事な人物たちの行動や言葉に自分なりの感想を文中で語り、カズサとも感想を語りあいます。●さほど本好きとは思えないルカが古典を手に取り、なぜ物語の世界に深く入るようになっていくのかは、作者によるこんな本の読み方があるよ、古典を今読むのもどうだろうという提案なのかもしれません。●ルカを通して、たくさんの気づきが伝えられ、読み終えたときには満腹感があります。小学校高学年から中学生に。

■「ばかみたいって言われてもいいよ」

吉田桃子／作

杏都（あんづ）はオシャレ大好きな中学2年生。両親の別居によって都会からいなかの町の「ここから商店街」に引っ越し、お母さんの実家／和菓子屋さんで暮らし始めます。●隣は薬屋で、同級生の詩音（しおん）の家。隣の席になった一見がさつな詩音と接するうちに、詩音の良さと商店街のさびれていく現状を知ること…。●思ったことをついストレートに口にしてしまい、感情にまかせてしまう自分の性格を、「ばかみたい」と否定的に思っている杏都は、商店街に開店したばかりの洋服屋のおにいさんと出会い、洋服を着こなすオシャレは、自分を表現することだと気づかされます。●物語のクライマックスは、古い商店街の活性化に杏都の発言が物議をかもし、劇的な変化を招きます。●自分に否定的で「こうでなければいけない」という杏都のような中学生には、かたくなな殻を破り、自分の可能性を見だし、歩み出す手助けになるかも。



■「よろこびの歌」

宮下奈都／作

合唱をテーマにした音楽小説ですが、心を静かに閉じている6人の女子高生が自分の道を見つけ出していく7つの



連作小説。●メインの主人公は有名なバイオリニストの母を持ち、声楽を志す御木元玲。入るはずの音大の附属高校受験に失敗し、新設女子校の明泉に滑り込み、これからの人生は仮の姿で、「着古されたまま洗い直されないシャツ」だという思いに駆られています。●他の5人も事情は違い、何かから逃れるように明泉に来て、よろいを身にまとっているかのよう。●物語が動くのは、学校行事の「合唱コンクール」で玲がクラスの指揮者・合唱指導として推されてから。最初の「よろこびの歌」の最後で玲の心に歌う希望の光がとまります。2作目から6作目までは、6人が少しずつ絡みながら互いの気持ちに変化を与え、最後の「千年メダル」で、玲の音楽・歌がみんなのよろいを脱がせ、前に進もうという気持ちを抱かせます。●合唱／歌が人々の胸を震わせ、歌う喜びが自分を奮い立たせる…中高生ならきっと惹かれることでしょう。●それぞれのタイトルは「ハイロウズ」の

曲。まさしく音楽小説であり青春小説！

■「空より高く」

重松清／作

今年度で廃校になる通称「トンタマ」高校の3年生、ネタロー・ヒコザ・ドカの3人トリオとトンタマ卒のジン先生、そしてジン先生の「最後の年に何かを始めよう。レッツ・ビギン！」という言葉に触発された無口でおとなしいムクちゃんが物語の進行役。トンタマ最後を飾る「玉川祭り」に向けてジャグリングに挑戦しながら、それぞれの「卒業」にも向き合う物語です。●文庫で350ページ以上なので、物語の中にいくつもの深みのある枝葉の物語がありますが、ムクちゃんとネタローのお話は、読み手にまっすぐ届くステキな恋物語です。そして最後を飾る「玉川祭り」は、物語の始めには想像できなかった熱量のイベントに…。●重松清さんがいくつもの作品でテーマの背景にする「ニュータウン」の今、子どもたちの自立を支える地域のおとなたちそれぞれの物語もじんときます。●中高生に伝わりやすい心の描写は作者のうまさ。ムクちゃんのかわいらしさが特に光ります。



おまけ

●今年は残念ながら海水浴もプールも楽しめない状況ですが、絵本の世界では楽しめます。●常呂図書館にある絵本のリストです。●家読み・読み聞かせに。

★

- * 「うみべのハリー」(マーガレット・グレアム ジーン・ジオン)
- * 「ぐりとぐらのかいすいよく」(なかがわりえこ・やまわきゆりこ)
- * 「ピッキーとポッキーのかいすいよく」(安西水丸・嵐山光三郎)
- * 「お化けの海水浴」(川端誠) * 「青いやどかり」(村上康成)
- * 「かにこちゃん」(岸田衿子・堀内誠一)
- * 「うみへいくピン・ポン・バス」(鈴木まもる・竹下 文子)
- * 「ねずみのかいすいよく」(いわむらかずお・山下明生)
- * 「くまの子ウーフのかいすいよく」(井上洋介・神沢利子)
- * 「うさぎちゃんうみへいく」(せなけいこ)
- * 「海べのあさ」(ロバート・マックロスキー)
- * 「うみざざざ」(きうちたつろう・ひがしなおこ)

